

# NPO 高齡社会をよくする女性の会 会報

No.169 2006年7月発行  
NPO法人高齡社会をよくする女性の会  
〒160-0022 東京都新宿区新宿2-9-1  
第31宮庭マンション802号室  
TEL. 03-3356-3564  
FAX. 03-3355-6427  
郵便振替 00100-0-79477



総会に先立って開催された理事会

## — 目 次 —

第2回総会報告	1
記念講演会「女性の会とともに生きて」吉沢久子	7
報告トーク「海外事情・時々刻々」	10
富安兆子、中西豊子、樋口恵子、沖藤典子、袖井孝子 「全国大会広島シンポ集」刊行のご案内	11
リレー・エッセイ 井上由美子	12
男老いを語る 福嶋浩彦	13
本の紹介・事務局だより	14

## 第2回

# NPO法人高齡社会をよくする女性の会総会

2006年6月17日(土) —— 於：女性と仕事の未来館

NPO法人として第2回総会が開催された。総合司会の稲葉敬子理事より総会定数990のうち、個人会員127名、グループ会員22名出席、委任状570、よって総会は成立と報告。樋口恵子理事長より開会にあたり、会場の北海道から九州までの参加者の紹介があり、全国の女性たちの力を結集して今年度も活動を充実させていきたい、と挨拶があった。袖井孝子副理事長が議長に選出され開会となった。



第一号議案

「2005年度事業報告」

沖藤典子副理事長

広島での第24回全国大会が戦後60年という節目の年に開催されたことは、大変意義のあることであった。4000人という参加者が会場に入りきれずモニターでの視聴となった大会でもあった。

また2月9日「朝日社会福祉賞」を受賞したことは、当会の24年に亘る活動が評価されたことであり今年度最大の喜びである。



2005（平成17）年度事業報告

【例会・シンポジウム】

- 4月16日(土) 4月例会『改正介護保険』利用者からの徹底Q & A
- 6月4日(土) 第23回旧会及び第1回総会
- 6月10日(金) 6月例会『改正介護保険』利用者から見た介護保険
- 7月26日(火) 7月例会『個人情報保護法』(1)
- 8月25日(木) 8月例会『個人情報保護法』(2)
- 8月28日(日) 『男女共同参画のための女性学・ジェンダー研究』
- 9月10日(土)～11日(日) 第24回高齢社会をよくする女性の会全国大会・広島  
『女性・老い・平和』於：広島国際会議場 参加者4,000人
- 9月19日(日)～20日(月) エイジングフォーラム2005 高連協行事参加 愛知万博
- 10月14日(金) 10月例会『災害は忘れる前にやってくる』
- 11月3日(月) 11月例会『北京JAC 第10回全国シンポジウム』
- 12月10日(土) 『女たちの討ち入りシンポ』於：女性と仕事の未来館  
ひとりから広がる多彩ななっとワーク  
第1部 世代をつなぐ～おひとりさまトーク  
第2部 ひとりの人口学・いま未来  
第3部 寸劇「シングル・まんだら—全5帖—」劇団WABAS
- 1月22日(月) 1月例会『スローエイジング・連続セミナー』  
「転ばず」セミナー 於：こころとからだの元氣プラザ
- 2月9日(木) 『朝日社会福祉賞』授賞式・祝賀会 於：朝日新聞社
- 2月9日(木) 『ともに喜びあう会』本会主催パーティー 於：資生堂パーラー
- 2月23日(木) 2月例会「老け込まず」セミナー 於：女性と仕事の未来館
- 3月6日(日) 3月例会「落ち込まず」セミナー 於：こころとからだの元氣プラザ
- 3月23日(木) 『介護ふれあい大賞』参加 於：メトロポリタンホテル

【調査研究】 アンケート「高齢者と家族が介護職員に期待するもの」

【提言】 4月6日(火) 平成17年度介護保険に関する意見書を尾辻秀久厚生労働大臣に提出

【会報発行】 計8回 【理事会】 5月20日(金)城西大学法人本部 【運営委員会】 計13回

【会員数】 個人1,022人、グループ会員88グループ、賛助会員10人 (2006年3月31日現在)

第二号議案

「2005年度収支決算書」

新井倭久子事務局長

収入の部の雑収入は、朝日社会福祉賞  
賞金200万円と広島大会収益金から80  
万円のカンパによるものである。

支出の部の啓発事業費が小額だったの  
は会場費の提供や講師のボランティアな  
どによるものである。

調査研究費はアンケートの粗集計が上  
がった段階で支払いは今年度になる。  
相談事業費がゼロなのは3月の会報に

載った1回のみのため。

国際交流事業費は他法人行事参加のた  
め小額で済んだ。

管理費については会報印刷代が印刷費  
に入っているので額が多くなっている。  
ホームページの作成費もボランティア  
並みでやっていた。

監査報告

藤原房子監事

監査の結果適正に処理されていると報  
告された。決算ゼロに対する疑問がある

2005（平成17）年度収支決算書

自2005年4月1日～至2006年3月31日

（単位：円）

収入の部	
科目	決算額
会費（含入会金）	7,092,000
印刷物売上	718,950
雑収入	3,083,377
当期収入合計	10,894,327
前年度繰越金	6,453,583
収入合計	17,347,910

支出の部	
科目	決算額
事業費	1,237,443
啓発事業費	946,808
調査研究事業費	77,565
相談事業費	0
国内交流事業費	160,697
国際交流事業費	52,373
管理費	8,779,536
給料手当	2,207,235
福利厚生費	0
会議費	313,637
旅費交通費	488,760
通信運搬費	1,749,349
水道光熱費	83,790
消耗品費	609,777
印刷製本費	2,518,526
事務費	546,259
管理費	218,400
雑費	43,803
予備費	0
当期支出合計	10,016,979
次年度繰越金	7,330,931
支出合計	17,347,910

貸借対照表

2006（平成18）年3月31日現在

（単位：円）

借方（資産）		貸方（負債・基金）	
科目	金額	科目	金額
現金	6,767	次年度繰越金	7,330,931
預貯金	6,806,778	前受会費	170,000
未収入金	220,719	預り金	3,333
什器備品	400,000		
電話加入権	70,000		
合計	7,504,264	合計	7,504,264

がNPOとしてはまだ若葉マークでいろいろ検討中であることに配慮していききたい。福利厚生費がゼロについては、職員が家族の保険に加入しているため納得した。

情報発信の費用を管理費の中に入れるのか事業費に入れるのかはゆっくり考えていくべき課題である。

中長期の展望として会員数が微増であることについては、若い人の参加を考えていかなければならないと指摘された。飯塚税理士、原行政書士が会場から、監査的な立場から判りやすい決算資料づくりをアドバイスしたと報告。



当会がより

よい老後のため、安心して暮らせる国創りをしている

会であることがわかり、やる気が出てきたとも発言。



### 第三号議案

#### 「2006年度NPO法人事業計画案」

樋口恵子理事長

2月に受賞した朝日社会福祉賞は会員皆様が受けたもので喜ばしいことである。今年の計画は25年変わらず当事者主義であること。高齢者、介護を受ける側からそして女性の視点から発言していく会であることを確認。

またネットワークを国際的にも広げているが、高齢問題はどんな国とでも仲良く語れる課題であり、来年は朝日マリオンでアジアを中心とした女性たちで築く豊かな高齢社会をめざし、老いによる貧困をなくしていきたい。

今年のハイライトは鳥取大会、地元会員による長期間にわたる綿密な準備がいまも続けられている。そして外部からの評価が高い勉強会は今後も継続していく。

認知症、介護予防、介護労働力、多床室に明日はあるかなど介護最前線の企画、健康、安全の為の配慮など多様多彩に奥行き深い企画を皆様とたてて参り

たい。様々な問題にたじろがず、古くて新しい問題にも倦まず活動していく。

社会的責任を自覚しつつ超高齢化の問題にもたじろがず、人生100年それぞれに居場所と出番が築けるような豊かな高齢社会づくりをすすめていきたい。

#### 報告事項・「旧高齢社会をよくする女性の会資産報告」

来年アジアの集会を開くと500万円はかかるので賞金とここから300万円をだしては如何か。今後も現状維持で活動していくと切り崩していくことになる。30周年には記念誌を残したいので、それにもあてたい、と報告。

### 第四号議案

#### 「2006年度予算案」

新井事務局長

会は会費によって賄われており、値上げの声もあるが現状を継続していききたいので今後も会員数を増やす努力を。

## 2006（平成18）年度事業計画

### 【シンポジウム】

- 9月9日(土)～10日 第25回女性による高齢社会シンポジウム  
「人生100年すべての世代に居場所と出番」  
鼎談、寸劇、分科会、記念講演／講師：小山明子氏  
於：鳥取県立倉吉未来中心
- 12月10日(土) 東京歳末名物「わたちの討ち入りシンポ」  
於：女性と仕事の未来館ホール

### 【啓発事業（月例会）】

- 4月8日 介護保険改正検証シリーズ・新制度  
「どこへ行く・介護保険～介護予防と療養病床のゆくえ～」  
講師：三浦公嗣氏（厚生労働省老健局老人保健課長）  
司会：袖井孝子（本会副理事長）  
於：女性と仕事の未来館セミナー室
- 5月20日 介護保険改正検証シリーズ・認知症  
「認知症を支える家族からの発言」  
講師：笹森貞子（社呆け老人を抱える家族の会東京都支部代表）  
村上敬子（広島県老人呆けの人を支える家族の会世話人代表）  
中西豊子（高齢社会をよくする女性の会・京都代表）  
司会：松村満美子（本会理事）  
於：女性と仕事の未来館セミナー室
- 7月、8月 検証シリーズ 行政、事業者、介護職員など  
以後 月例会として研究会・シンポジウムを開催

### 【国内交流事業】

- 5月28日 災害福祉広域支援ネットワークサンダーバード研修フォーラムに参加  
協力し、「高齢女性と防災」についての提言、意見収集
- 6月 高連協（代表：樋口恵子・堀田力）オピニオンネットワーク調査に協力  
「シニアの環境問題調査」／集計、分析後、6／30環境大臣ほか関係  
機関に提言
- 6月15日 ヌエック（於：国立女性教育会館）主催事業「女性関連施設・団体リ  
ーダーのための男女共同参画推進研修」に参加協力
- 7月6日 人口問題協議会、ジョイセフ主催「世界人口デー」シンポに参加協力

### 【国際交流事業】

- 5月31日～6月2日 第8回IFA世界大会（於：コペンハーゲン）で「WABAS」  
の活動について発表（自費参加者4人、総会記念イベントで報告会を  
持つ）
- 6月 「朝日福祉賞授賞記念国際シンポ」（07年6月30日、於：有楽町朝日ホ  
ール）準備委員会立ち上げ
- 8月 世代間交流国際フォーラム参加協力

### 【調査・研究事業】

アンケート「高齢者と家族が介護職員に期待するもの」集計・分析、提言  
災害と高齢女性に関するイベント、情報収集から関係各機関へ要望書提出

### 【相談事業】

☆1日電話相談 ☆会報に相談コーナーを設ける

〔会報〕年6回（隔月刊）＋2回臨時増刊号＝8回発行（8～16P）  
広報活動、ホームページの充実を図る

〔総会ほか〕6月17日 定期総会  
記念講演 講師：吉沢久子  
報告トーク：樋口恵子、沖藤典子、袖井孝子、富安桃子、中西豊子  
於：女性と仕事の未来館ホール

〔出版〕第24回全国大会（広島）報告書

〔総会〕年1回 〔理事会〕年1回 〔運営委員会〕月1回

第五号議案

「役員改正」

旧役員再選

新役員

有馬眞喜子、中尾敦子

すべての議案が承認され総会は無事終了した。

総会終了後、

鳥取から駆けつけた「第25回全国大会」の事務局長外3名の方が登壇。多数の参加を呼びかけた。

次年度の静岡、次年度の

青森からも声があり、会場からの大きな拍手に包まれ、第一部は無事終了した。

木村民子理事

(谷島陽子・記)



2006（平成18）年度予算書

(単位：円)

科 目	金 額	備 考
I. 経常収入の部		
会費（含入会金）	6,730,000	個人会員990人、グループ会員86、賛助会員10人
印刷物売上	600,000	例会・シンポ等資料代、会報増部・書籍売上
雑収入	39,069	寄附金、受取利息ほか
前年度繰入金	7,330,931	
収入合計	14,700,000	
II. 経常支出の部		
事業費	3,500,000	
啓発事業費	1,900,000	全国大会、歳末シンポ、例会
調査研究事業費	600,000	「高齢者と家族が介護職員に期待するもの」集計費
相談事業費	100,000	1日電話相談事業ほか
国内交流事業費	300,000	他団体との連携事業
国際交流事業費	600,000	国際シンポ準備活動費、会場費内金
管理費	8,783,000	
給料手当	2,320,000	事務局（週3日×2人）給料、ボランティアほか
福利厚生費	78,000	
会議費	400,000	総会、理事会
旅費交通費	500,000	事務局・運営委員交通費ほか
通信運搬費	1,700,000	会報送料、電話代ほか
水道光熱費	85,000	
消耗品費	400,000	コピー機リース代、電話機ローン、メンテナンス代
印刷製本費	2,500,000	会報製作印刷費、封筒印刷、入会案内資料、コピー代
事務費	500,000	事務用品、税理士行政書士手数料
管理費	220,000	マンション管理費（18,200円×12ヵ月）
雑費	80,000	
予備費	2,417,000	
予備費	2,417,000	
III. その他資金支出	0	
当期支出合計	14,700,000	

## 「女性の会とともに生きて」

講師 吉沢久子（生活評論家・本会理事）

日本の伝統的な生活習慣や暮らしの知恵を生かしながら、たおやかに元気に生きていらっしゃる88歳、われら女性のお手本である生活評論家の吉沢久子さんをお迎えしご講演いただきました。

吉沢さんは、姑とご夫君を見送り、子供のない一人暮らし歴20数年ですが、「高齢社会をよくする女性の会」発足当時からの会員でいらっしやいます。その「女性の会」とともに生きてきて、感じたこと、大事なことをわかりやすく、優しい語りでお話をされました。（一部省略）

「高齢社会をよくする女性の会」の立ち上げにあたっては、姑について、私にいろんなことを考えさせてくれたなと思っっているんです。姑の死から2年くらい経って「高齢社会をよくする女性の会」に参加をさせていただきました。私は一人で姑の介護を抱え込んでいましたの

で、介護がいかに大変かということをつくづく感じていました。家では夫が全然役に立たないものですから、一生懸命一人で介護をしました。その中で感じたことというのは、私は姑を尊敬しておりましてし素敵で人でしたので、介護が嫌だとは思っていませんでした。しかし実際に一人で介護するということが、夜も昼もないという介護は、自分が駄目になつてしまうことなんです。もし、自分がここで参ってしまったら我が家は崩壊するなと感じました。夫が何かできる人であつたらよかつたのですが、昔風の男でしたので何もできずうろろするだけだったのでございます。そうすると、姑が残したことは、私が姑を嫌がらず介護ができたことは何かしら？ 1人の人間が介護をかかえこむことについては？ さらにこれで家庭が崩壊してしまつたらどうす

るのだろうか？ ということを一生涯懸命考えさせられました。そうするとどうしても、「介護の社会化」ということがない限りだめだなあと考えさせられておりました。介護は、した方じゃないとわからないかもしれないが、本当にご飯を食べさせることから、下の始末まで、ちょっと動くことさえも手を貸さなければならぬのです。これは健康な人でも相当疲れてしまう。そういうことを一つ一つ感じさせられまして、もし、私が倒れたら、うちは駄目になる。そしたらどうなるのだろうか。どうしても介護の社会化が必要になるんじゃないかと。その頃は、まだそうしたことは何も言われない頃だつたんですね。有吉佐和子さんのお書きになつた「恍惚の人」ですか、あれによつて社会がこういうことに少しずつ関心をもつたということでしたね。ですからこの「高齢社会をよくする女性の会」が出来たということは必然というより女たちのこういうものが欲しいという気持ちで樋口代表に乗り移っていたのではと思えます。実は、はじめてのシンポジウム



がありました。1982年だと思えます。この時はまだ会が立ち上がっていませんでした。この時は、たくさんの出席者の間に入ってパネリストの話聞いていましたが、そのときパネリストではない人が、いろいろな発言をなさいました。これはどういふことかと申しますと、今でもはつきり覚えているのですが「ボケ老

人をかかえる家族の会」の方が「私は姑の介護で苦労した。だからこれからどんな人と再婚してもうまくやっていける。どんな苦労も介護に比べれば楽だろう。」というようなお話をなさい、私はとつても身にしてみました。丁度自分が介護の大変さを感じていたからです。次の年「高齢社会をよくする女性の会」が立ち上がりました。そこに出席してみると何人も泣いていました。立ちあがって発言する内容は「ここに来て私一人じゃないんだとわかって明日から生きていこうという力がわいてきた。」「こんな苦労をするなら自殺したいわと思っていた方が多いんですよ。」という話も聞きました。私もその頃大変だと思っていました。丁度、会が立ち上がるまで、皆さんがこういうことを話し合うことがなかったんですね。家にボケ老人を抱えても、あるいは病気の両親を抱えても、それを女たちが引き受けて1人で嫁や妻や娘が一生懸命介護をしていた。ただそれだけだったんですね。この会にいらした方たちが「自分1人じゃないんだと知って力になっ

た。」とおっしゃったんですね。これは大きなことだったなあと思いました。つまり自分ひとりで大変だ大変だと思っているときは声にならなくて、何かの都合でつぶされますが、みんなが声を出すということとはどんなに大事かということをこの時感じさせられました。

女性が介護の大変さを声に出し、その声が大きくなって「介護の社会化」の必要性が認識され現在の介護制度につながったこと。1人で大変大変と愚痴っていたのは前に進まないというお話は、現在の女性問題や老人問題に通じるお話で、4半世紀たった昨年、会が「朝日社会福祉賞」をいただいたことを女性のいきおいを感じたと吉沢さんは大変喜んでくださいました。また各地の分科会に出席されるたびに、はじめ泣いてばかりいた女性たちが女性の視点で問題提起し解決していく様子を見て、新しい考え方をする女性たちが出てきて嬉しい。1人で考えていたことをみんなで考えることが出来る会の素晴らしさをお話になりました。やがて名古屋の大会の際、分科会に出



席したときのテーマが「女性と葬儀」についてでした。そのときに印象に残ったのは「男の香典は1万円ですが、その妻は5千円なんですよ。」とユーモアを交えながら奈良の方がお話をしてくださいました。そして「自分の葬儀くらいは自分の意見でやりたい。他人には何も干渉させない。こうしてくれときつちり頼んだんですよ。」と言っていました。周りの方が「そんなことをしたら周りがるさくないですか？」と聞いたのですが

「いいえ、私のことですからね。自分の思うようにやりたい。」とおっしゃっていました。奈良はいろいろ難しいところと聞いていたので、感心してその方を見ておりました。つまり、はじめは泣いてばかりいた会が、こういう発言をする人が出てきたということはすごいことだと思われました。また、仙台の時でしたが「私は家督の妻ですが、舅が10年も寝ている。それこそ床ズレひとつつくらず一生懸命介護してきた。姑も入退院を繰り返している。ところが主人の兄弟達があると「農家のクセに草むしりもしていな

い。」といろいろ言うんですよ。それを誰も「そうじゃない。いろいろ手がかかると言ってますよ。」と言ってくれる人がいないんです。だから私は今日、こういう会があるので、後はどうなってもいいやと思っただけで来ましたと言っています。こういうふうな強い女の気持ちは自分ひとりじゃないんだという、みんながそうなんだということをやる機会を得たということを考えておりました。

姑と夫を見送った後、吉沢さんは自分のために生きる自由を手に入れましたが、現在88歳になっても元気に生活を楽しむ実践的な暮らしの極意を、生活のリズムを崩さないこと、食べること、寝ること、昼寝をすることなどお話をくださいましたが最後に、あんまり頑張りすぎないことが、自分を何時までも元気にするというお話を、半世紀前友人の結婚式の会場で聞いた坪田譲治先生の言葉を引用されてお話をくださいました。

年をとってくるとエネルギーが下がってまいります。そのエネルギーを無理に回転させないように、それをずっと前に

考えさせられたのは友人の結婚式の坪田先生の言葉でした。結婚の時の言葉というのはいくらと勢いのいいことを仰るのですが、先生は「君ね、これから生きていくうえで希望はなるべく小さく持ちなさい。」という言葉でした。普通は「青年よ大志を抱け」などというので、びっくりして聞いていましたが、ああそうかと思いましたのは、あんまり大きな希望を最初から持つということ、それが出来ない場合の辛さが出てくるのではないのでしょうか。しかし小さな希望であれば出来た時の達成感があるし、またその上から希望を持つたり、計画を持つことがどんなに大切だろうか、そしてそれがまた達成感を持たせてくれることだなと感じさせてくれたんです。

88歳とは思えないつやのある若々しい声、歯切れのよいお話は、これから私たちが目指す元気印のおばあちゃんの模範のようでした。吉沢先生何時までもお元気で素敵にお暮らしく下さいませ。

(柳原智子・記)

# 報告トーク「海外事情・時々刻々」

デンマーク・スウェーデン……富安兆子、中西豊子、樋口恵子  
ストックホルム、オスロ……沖藤典子  
中国・韓国……袖井孝子



## 富安兆子

5月末、デンマークの首都コペンハーゲンで開催された「第8回高齢化に関する世界会議（IFA）」は地球規模で進行する高齢化問題をさまざまな角度から論じようとするもので5月31日のセッションで発表を行う樋口恵子代表に随行、京都の中西豊子さん、福岡の飯田恒美さん共々参加した。虐待や社会的疎外を扱ったものから、参画、エンパワーメント、挑戦などの積極的イメージのテーマまで70近いセッションやビデオフォーラムがあり、世界各地のNGOや研究機関、大学などからの参加で構成されていた。

「高齢社会の諸問題をジェンダー分析し政策に反映させる」という趣旨のセッションでの樋口代表の発表には発題者や参加者の多くが共感を示し、高齢女性の状況には世界共通の問題があることをうかがわせた。その間スウェーデン南部のエスロプ市の状況を見てきた。

## 中西豊子

エスロプ市は、森と湖のある人口3万の町。65〜79歳と80歳以上に分け、病气や疾病がない人は高齢者の範疇に入れない。福祉コミュニティが、訪問介護、ケア付き住宅（特養）を用意、建物ごとに、24時間ケアがついている。ここに入るに

は要介護認定が必要。このようなケア付住宅でターミナルケアまで行い、最期まで看取る。エスロプ市では国のモデル事業で、ケアの技能開発をしている。准看護婦、ヘルパーなど、教育を受けたい人がいる場合は、その教育の期間、穴埋めの職員の費用は国から出し、1人ひとりに合わせた必要な教育を行うという。

利用者が70人ほどのケア付住宅を見学した。入居者の状態によつて、10人ほどのグループホームと15人程度のブロックに分けられていた。約60人のスタッフが働くという。レストランは地域に開放されている。費用は月額平均8万円くらい。払えない人には割引制度もある。最高15万円弱支払う。1人約35万円ほどは税金でまかなわれているという。

## 樋口恵子

北欧を訪ねて印象に残ったエピソードを2つ。

ちようどコペンハーゲンの日本大使館小川大使はじめ館員の方たちと歓談中、その日発表されたばかりの出生率1・25を聞きました。

大使曰く、「男性の育児参加が何より大切で、国民の幸福度も出生率も高い。父親の育休は当たり前と思うようになりました」。

若き書記官曰く「東京で共働きの妻が明日から産休に入り、こちらに来て出産します。大使のお許しを得て父親の育休をとらせていただきます」うーん。こういうやり取りが、日本の企業トップとエリート社員の間に行われれば、出生率も少し上がるんじゃないやしませんか。

こちらはスウェーデンの話。介護の質を高めるには、介護職員の研修が必須というのは日本と同じ。しかし、お金を出して代替職員を雇うところが大違いです。スウェーデンでは、介護の質を語る今のキーワードがインフルエンスでした。影響力というのでしょうか。要介護者の意思が、どう反映されているか、尊厳の具体的あらわれですね。

沖藤典子

相模原市内と周辺に住む男女で、「共同参画」市民スタディ21という、大きな名前の小さな学習会をやっています。

5月21日から8日間北欧2市を14人で訪問し、介護、世代間交流、女性政策などを「広く浅く」勉強してきました。

ストックホルム市では、若年認知症のグループホームを訪問し、明るくて元気な入居者達と遊びました。また未解決なDV問題、その深刻さは衝撃的でした。

オスロー市では近郊の「国立女性博物

館」を訪問し、洗濯史のコーナーの、日本と同じ洗濯板にびっくり。労働や墮胎の歴史では、洋の東西を問わぬ女性の過去、その過酷さに一同涙しました。男女平等問題センターでの、雇用差別の実態も示唆に富むもので、社会の意識を変えるのは闘いだ、それは地道な日常活動にあると、新たな力を得た旅でした。

袖井孝子

日本では、福祉の市場化や民営化には、かなり抵抗があるようだが、急速な高齢化と経済発展を遂げた中国や韓国では、そうした抵抗感は薄いようだ。昨年8月には中国を、今年3月には韓国を訪問して、有料老人ホームを訪問した。両国とも、ちょうど日本のバブル期のように健康で裕福な高齢者むけの豪華な施設を建設中。韓国のホームは、プール、ゴルフ練習場、スポーツ・ジム、屋上庭園などを備え、高級ホテルなみだ。

中国のホームは、日本から短期滞在の高齢者を集めて、中国語、太極拳、中国料理を習わせる一方、隣接する大学で日本語を初めとする授業を担当してもらうことを想定している。こうした企画は、間もなく定年を迎える団塊の世代にアピールするかもしれない。

「全国大会・広島シンポジウム」刊行のご案内

印刷実費一冊一〇〇〇円

送料共で一、二〇〇円

「高齢社会をよくする女性の会第24回全国大会・広島」はおかげさまで盛会のうちに終わり、気がつけばもう、鳥取大会が間近です。この度、被爆60年という歴史的にみても象徴的な会となった広島大会の臨場感あふれる報告集が出来上がりました。なんとといっても、「あのシンポジウムをもう一度」ではありませんが、白熱した会場の雰囲気再現実されていることがこの報告集の特徴です。

コンセプトは「女性・老い・平和」でしたが、市原悦子さんの記念講演、上野千鶴子さん、樋口理事長、春日実行委員長3人の痛快トーク、7つの分科会など、どれもこれも報告集を読むことで、元気がでてきます。ご参加くださった方の思い出でなく、大会ご欠席の皆様も会の全容がわかりますので、ぜひお買い求め下さい。

広島大会実行委員長 馬庭恭子

\*申し込みは東京事務局まで

# 「老化」、「老い」

7月1日付の毎日新聞が、日本の高齢者の働く数が世界でもっとも多いことを報じていた。

高齢者こそ昨今の社会保障の財源抑制のターゲットになっていくのだから自分の身を守るためにもいわば当然だろう。とりわけ改正介護保険法は、介護予防が代表するように、高齢者に「老いる」などという贅沢を認めてはいない。死ぬまで人の世話にならず、元気でいなければいけないのだろうか。

団塊世代の定年期、2007年問題を翌年に控えて、私たち45、46年生まれば一足先に「還暦」を迎えた。私の故郷長

井上 由美子  
いのうえ ゆみこ



崎では数々の「還暦同窓会」が催され、小学校同窓会に至っては実に48年ぶり、感激の再会を果たした。

私自身の「還暦」に対するイメージは乏しいものだった。少なからず高齢者の仲間入りすることへの抵抗感もあった。ところが「還暦」は同窓生たちの上で、誇らしげに光り輝いていた。その輝きの輪の中で、若さへのこだわりは消え、老いは私の中にストンと落ちた。

これまでの人生を振り返ってみる、生きることの意味は、「生きること」や生身から離れたところで何かを「やること」、「行為」にあった。それは必然的に

働き続けることにつながっている。

いま私自身確実に脳と身体の高齢を実感している。ところが私の心は状況的にもこれを認められない。こうした心と身体・脳との齟齬に悩まされていた。

先人たちは「還暦」も「喜寿」や「米寿」といった年齢という生身を祝ってきた。私たちが「行為」にのみスポットを浴びせる限り、ただ年輪を重ねただけの長寿を祝うことはできないだろう。

いつの間にか心を裏切っている身体と脳。これを「老化」と呼ぶならば、身体と脳に心を添わせるありようを「老い」というのだろうか。

2007年問題を前に「老い」の大切さをいかに提起できるか、私たちはいま課題を突きつけられているようだ。それには社会保障の整備が条件となることは言うまでもない。

## プロフィール

1946年、長崎市生まれ。城西国際大学教授。「バリアフリー」(中央法規)、『協生の福祉』(明石書店)、『医療福祉総合ハンドブック』(医学書院・共書)など。



## 会社人間から 地域人間に

ふくしま ひろひこ  
福嶋 浩彦 (我孫子市長)

1956年鳥取県米子市生まれ。筑波大学除籍。38歳で我孫子市長となり、現在3期目。福祉自治体ユニット代表幹事。著書に「市民自治の可能性」(ぎょうせい)。

現役時代から「二足のわらじを履く」  
—男性が幸せな一生を送るための秘訣は  
これだと思ふ。

会社人間だった男性が、定年後うまく  
地域にとけ込んで活躍し、充実した第2  
の人生をスタートさせる。それには、カ  
ルチャーシヨックを2つか3つは乗り越  
えなければならぬ。

女性が中心で担ってきた地域の活動  
に、「これからは企業で活躍してきた俺  
が指導してやる」といった感じで入って  
いく男性は、まず失敗する。いきなり女  
性たちの前で演説して、「くすくす」と  
笑われ、そのあと参加する氣力を失って  
しまう。「社会」を知っていたつもりが、  
実は知っていたの「会社」だけ、という  
ことも多い。地域社会については、政治  
や経済も含めて、地域で活動してきた女  
性の方がはるかに良く知っているのだ。  
また会社時代は、〇〇部長、〇〇常務  
と肩書き付きで呼ばれていたが、定年で  
地域に戻ると肩書きが無くなる。これは  
当たり前なのだが、それだけにとどまら  
ず名前まで無くなる。

会社の会合に夫婦で行ったときは、女  
性の方が「〇〇部長の奥様」となって名  
前が無かった。しかし、地域に入ると、  
今度は「〇〇さんのご主人」となって、  
最初は自分の名前さえ呼んでもらえな  
い。

それでは男性だけでNPOを立ち上げ  
ようとメンバーを募集したら、「顧問」  
希望者ばかり集まったという。責任をと  
る理事長と、汗を流して働く会員は敬遠  
されて、口だけ出す顧問に希望が殺到し  
たということらしい。これは、行動が先  
にくる女性たちが男性を皮肉った作り話  
かもしれないが、まったくあり得ない話  
でもなさそうだ。

それでも、カルチャーシヨックを乗り  
越えて地域に軟着陸し、ボランティアや  
市民活動、コミュニケーションなどで  
頑張る男性の姿は確実に増えている。  
ただ、出来るならば現役時代から仕事  
以外に、地域の中で自分の活動と居場所  
を見つけておきたい。後で余分な苦勞を  
少なくできるし、人生をより豊かにでき  
るはずだ。

## 本の紹介

「尊厳を支えるケア」をめざして

編集 石原美智子

中央法規刊 二〇〇〇円十税

2015年の高齢者介護―高齢者の尊厳を支えるケアの確立に向けて―が2003年に、当時の中村秀一老健局長のもと高齢者介護研究会でまとめられました。これは団塊の世代の人生終焉の姿に対する希望です。

30年にわたって高齢者介護の質を追求してきた現場から、尊厳を支えるケアの実態とはどういうことなのかを再認識しつつ纏めたのがこの本です。

「寄り添うケア」と言われても、時間がないのよ、という現場の率直な声がある、でも、どうすれば相手の尊厳を守りながら自身も納得できるのか、など「失敗事例から学ぶ50のヒント」のサブタイトルの通り、経験年数の浅い介護者も参加した本音の介護現場の事例集です。

相手の尊厳を認め、自身も尊厳を守られる介護の世界を作り上げることによって、団塊の世代の安寧が得られるのです。

あらゆる人々が尊厳という意味を再認識する必要がありそうです。

やっぱり「終（つい）のすみか」は有料老人ホーム

滝上宗次郎著

講談社刊 一六八〇円（税込）

介護保険のお陰で、褥瘡を作らない介護技術が普及しました。代謝機能が衰えた超高齢者にも、副作用の少ない薬が次々と開発されました。人工栄養は日進月歩です。今や、「不老」は解決しませんが「不死」となり、介護は10年が普通。そして、ほぼ全員が車椅子や認知症となる時代です。とうとう高齢者虐待防止法まで施行されました。

老人病院が消えゆく運命となり、特養の利用は困窮者に絞られました。有料老人ホームもグループホームも、自治体から嫌われて新設がストップしています。そのため、有料老人ホームは売り手市場で、「高かろう悪かろう」が一段と悪化しそうです。

その点、本書は正義の味方。悪徳ホームの窓口を紹介しています。「認知症の介護」「ホーム選びの極意」など、人生90年を豊かに生きる知恵が満載です。

皆様にお願いします。借りて読まずに買ってください。

## ご寄付のお礼

理事の吉沢久子様、熊本の荒木綱子様から多額のご寄付を頂戴いたしました。厚く御礼を申し上げます。

### 事務局だより

★アンケート「高齢者と家族が介護職員に期待するもの」にご協力いただきありがとうございます。集計分析中です。8月例会と鳥取大会分科会で報告します。お楽しみに。

★もう一つのアンケート「高連協、環境問題調査」について、短時間回収の依頼でしたから、グループ会員有志の方にご協力いただき、1200票の半数は女性の回答、その大半は「WABAS」からでした。主催者は驚きを隠さず、理事長も高連協代表として、しっかり分析、行動指針など新たな展開にあたっています。これも皆様のご協力のおかげです。

★広島大会シンポジウムは事務局でお申込み受付。すぐお送りします。

★鳥取大会チケットのみご入用の方は事務局へご一報ください。（新井倭久子）